

王木田猪弓全集

第四卷

學習研究社

國木田獨歩全集 第四卷 (第七回配本)

G六四三〇四

昭和四十一年一月十日第一刷發行
昭和四十四年八月十日第四刷發行(C)

定價 千五百圓

著 者 國木田獨歩
編集者 國木田獨歩全集
編纂委員會

發行者 古岡秀人

印刷者 矢島貞雄
東京都大田區上池臺四ノ四〇ノ五
長野市西和田四七〇

發行所
株式會社 學習研究社
東京都大田區上池臺四ノ四〇ノ五
電話 (七二〇) 一一一一
振替 東京一四二九三〇

小說三
翻譯 · 翻案

目

次

小説三

泣き笑ひ

疲労

窮死

都の友へ、B生より

湯ヶ原ゆき

都の友へ、S生より

暴風

節操

渚

竹の木戸

二老人

九

八

七

六

五

四

三

二

一

三

五

翻譯・翻案

童兒の星の夢

一七

絲くづ

一九

非凡人

一五

寶

三七

怠惰屋の弟子入り

一四

騙術の妙

一三

大飯喰ひ

二九

支那因果物語

二三

支那黒衣仙

二六

支那舟の少女

二七

支那三驕術

二八

支那石清虛

二九

物語姉と妹

100

支那髪
物語

111

宿營の一夜

112

女丈夫

113

決闘家

114

愛國者

115

人生

116

解題

瀬沼茂樹

117

主なるヴァリアント

118

119

120

121

122

123

124

125

126

127

128

129

130

131

132

133

134

135

136

137

138

139

140

141

142

143

144

145

146

147

148

149

150

151

152

153

154

155

156

157

158

159

160

161

162

163

164

165

166

167

168

169

170

171

172

173

174

175

176

177

178

179

180

181

182

183

184

185

186

187

188

189

190

191

192

193

194

195

196

197

198

199

200

201

202

203

204

205

206

207

208

209

210

211

212

213

214

215

216

217

218

219

220

221

222

223

224

225

226

227

228

229

230

231

232

233

234

235

236

237

238

239

240

241

242

243

244

245

246

247

248

249

250

251

252

253

254

255

256

257

258

259

260

261

262

263

264

265

266

267

268

269

270

271

272

273

274

275

276

277

278

279

280

281

282

283

284

285

286

287

288

289

290

291

292

293

294

295

296

297

298

299

300

301

302

303

304

305

306

307

308

309

310

311

312

313

314

315

316

317

318

319

320

321

322

323

324

325

326

327

328

329

330

331

332

333

334

335

336

337

338

339

340

341

342

343

344

345

346

347

348

349

350

351

352

353

354

355

356

357

358

359

360

361

362

363

364

365

366

367

368

369

370

371

372

373

374

375

376

377

378

379

380

381

382

383

384

385

386

387

388

389

390

391

392

393

394

395

396

397

398

399

400

401

402

403

404

405

406

407

408

409

410

411

412

413

414

415

416

417

418

419

420

421

422

423

424

425

426

427

428

429

430

431

432

433

434

435

436

437

438

439

440

441

442

小
說
三

泣
き笑
ひ

泣き笑ひ

時之助の母親は女中お光の歸るのを一刻千秋の思で待て居る。

『又た彼の魯鈍のことだから、のろくさへして居るのだらう、眞實に仕様がないねえ』と大焦燥に焦燥れて居る。

するとお光は果して頗る呑氣に、鼻歌でも唄はんばかりの様子で歸つて來た、と母親には見受られたのである。いきなり

『お光！　お光！　お前何をぐず／＼して居るのだねえ、眞實に！』

『へえ。』と年は十七ばかりの、孤児なるが故に可哀さうだと、東京から連れ歸つた女中が、眼をパチクリ／＼、奥様の顔を眺めて居る。

『「へえ」もないもんだ、それで片山の武さんは歸宅つて居ましたか。』

『へえ、片山の坊様は歸宅つて居ました。』

『そんなら大村の坊様は？』

『歸宅つて居ました』

母親は迫込んで、

『そんなら我家の坊様は如何したか尋問ましたか。』

『へえ。』

『へえじやアありません、眞實にお前のやうな大馬鹿がありますか、我家の坊様の事を聞ないくらひならお使に行つて何の役にたちます。』

『でも奥様が只だ片山の坊様と大村の坊様が歸宅つたか聞いて來いとお仰いましたから、それで……。』

『そう言ひましたとも、けれど何故我家の坊様はと一言訊くことが出来ません、』と白眼つけて、直ぐ奥に向て

『眞實に貴方心配ですか、御自分で一寸と聞いて來て下さいませんか。』

夕闇薄暗き縁側に涼んで居た休職判事の父親は又た悠然たるものである、團扇をパタリ／＼

『まあお前のやうにワイ／＼騒いだつて仕様がないよ。必定寄道でもしたのだから、今に歸宅つて来るよ。』

『貴方もそんな呑氣な事ばかりおつしやつて萬一の事があつたら如何なさいます。』

『萬一の事とはどんな事だ。』

『萬一のことゝは萬一の事です。』

『我家の時どもが水みずへでも陥つたと言ふのだらう。』

『さうですとも。そんな事が無とも限りません。連伴が少年のことですから驚いて逃て来て知らん顔をして居るなんて、よく東京とうきやうでもあるぢやアありませんか。』

『そんな馬鹿々ばかしいことがあつて堪たまるものかね。第一お前まへは時等どもが釣魚つりに行く場處ばしょの模様もやうを知らないから、そういうこと言いふのだ、今日けふ時ときが釣つりに往いつた處ところは平地ひらちで池いけの堤提ていといふものがない、だから落おちちよう

泣き笑ひ

がない。よしんば落ちたにしても足をのめりこます位のもので決して生命に彼是ある筈がないのだ。必定、寄道を爲て居るのだよ。』といはれて乙なことおつしやると言ひたそうな身構をして東京の奥様

『堤があるか無いか、昨年來たばかりの私にはお國の事は存んじませんが、もしか貴方が。斷て寄道を爲たのだとおぼしめすなら一寸と聞いて来て頂くわけに参りませんか知ら。片山の坊様でも我家の時が寄道を爲たのか池に陥つたのか位は知て居なさる筈ですから。』と東京式のせきこんだ調子で迫る。一方は

平氣なもの、

『お前が心配するのだからお前が聞にゆけば可ちやアないか』

『行きますとも、そんなら私が行きます。』

『アレ奥様、私が参ります。』

『いゝえ、私が行きます。お前などに頼むと安心が出来ません。』

『いゝえ、私が参ります。』

『うるさいねえ。兩人で行つたら可いだらう。』と父の一聲。母親とお光は申しあはしたやうに沈黙つて

了つた。そして、こそゝ、兩人は外方に出掛けた。

『お光や。お前は片山へ行つて聞いておいで。私は此處で待つて居るから。時は平時この道から歸るから。』

と言はれて家から四丁ばかりの淋しい辻に奥様を残してお光は再び片山の家へと急いだ。

夕月煙霞をこめて蓮池の香り高き處に母親は月に向つて立つて居た。暫時するとお光が歸つて来て。

『奥様矢張坊ちやんは居残りなんだそうです。』

『一人でかえ。』

『へえ。』

『まあ何といふ兒だらう、田舎道の一里上もある所へ遊びにゆきながら、日が暮れても歸つて來ないんで……』

『今にお歸りになりますよ。』とお光は奥様の泣き出しそうな聲を聞いて慰める。奥様は無言で蓮池と屋敷との間を通る眞直な道を眺めて居たが、

『お前先へお歸り。そして風呂の下を見てお置き。私は少し此處で待つて見るから。』

『畏まりました』とお光の去つた後で、母親は『若しか』といふ場合を色々に想像して、胸の痛くなる程度心配して待て居ると、間もなく蓮池の邊に小さな影が見えだした。だんづく近づいて來るのを見ると、時之助らしい。けれども若しか又た他家の兒かも知ぬと心も空に見つめ居ると、釣竿を肩にして左手に魚籠を提げ、小聲で唱歌を歌ひながら來るのは正しく時之助である。

『時じやアありませんか』といふ一刹那、悲變じて喜となる。

『ヤア、母様其處で何を爲て居るのです。』

『まあ此兒は。何を爲て居る所じやありません。お前こそ斯んなに遅くまで何をして居たのです、』といふ時、喜變じて怒となる。

『釣つて居ました。今日は澤山釣れましたよ。』